

『源氏物語』と横川僧都源信



浮舟を助けにゆく横川の僧都
「源氏物語手鑑」(手習)土佐光吉筆
(和泉市久保惣記念美術館蔵)



源信 僧都 生誕伝承の地に建つ碑

「そのころ横川に、なにがし僧都とかいひていと尊き入住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。」
『源氏物語』(宇治十帖手習の巻)の冒頭部分であります。源信とその母、妹安養尼願証がそのモデルといわれています。源信らは、当時、信心深い一家として貴族たちを納得させるほどに有名であったのです。

かつて折口信夫は、源信誕生伝承の地・市内良福寺辺りが、二上山の落日を仰ぐのころあいの場所であることに注目しました。幼い源信一千菊丸が、当麻曇茶羅にかいま見た西方浄土の幻を、日々仰ぐ二上山の莊嚴な落日の彼方と重ねられたとしても不思議ではないと考えました。源信は信心深い母から西方浄土の教えを聞かされ、当麻曇茶羅を拝し、二上山の落日を仰ぐうちに、幼いなりに仏教への関心が芽生えていったのではないのでしょうか。後年、いかにすれば西方浄土に往生できるかという阿弥陀念仏実践の書『往生要集』を著わしました。寛和元(九八五)年、源信四十四歳の時です。

紫式部の父藤原為時は、念仏結社運動のリーダーで源信の盟友である慶滋保胤と親しかったといわれ、このころから紫式部は、つねづね源信の名声を耳にしていたものと思われれます。

紫式部が源氏物語を起筆したころ、貴族社会での源信の名声は絶頂に達していました。時の大立者藤原道長ら王朝貴族は、『往生要集』を写したり、源信のもとに使いを遣わしたりしました。

紫式部が(宇治十帖)を成した寛弘七(一〇一〇)年、源信六十九歳。横川にこもり、天台教学の著述に精励するとともに、貴族から庶民にまで広く救済の門戸をひらき、靈山院釈迦講に情熱を傾ける毎日でした。若いころから源信の名に親しみ、自身も天台の教学に関心が深かった紫式部が横川の僧都に源信の面影を重ねたのは極く自然ななりゆきであったでしょう。物語の終局「手習」や「夢の浮橋」で、特に横川の僧都を登場させたのは、このような形で解決が読者である当時の貴族社会の人々を十分納得させるものであったからにほかなりません。当時の貴族社会の人々の間に、源信に代表される天台の浄土の教えが広く浸透し、王朝貴族の精神生活を形成していたというのであったでしょう。

ともあれ、数百人にも及ぶ男女のさまざまな運命があやなす大河のような源氏物語五十四帖は、雨と匂宮との愛情の間に苦悩し、入水の決意をした浮舟が、死ぬべき身を、横川の僧都に助けられ出家して、小野の尼庵にこもり、はじめて心のやすらぎを得るところで無限の余韻のうちに幕を閉じています。

宮仕えを離れ、寂寛たる日々を送っていた紫式部は長和三(一〇一四)年、四十歳余でこの世を去り、源信もまた長和六(一〇一七)年、七十六歳の生涯を閉じました。同じ時代を生きた彼の藤原道長は太政大臣に昇りつめたが、十年後の万寿四(一〇一七)年十二月、六十二歳で大往生したと今に伝えられています。

タワソウオッチャー
矢野 達生(関屋北)